

広告



▲さつまいも栽培について語る小亀さん。

◀商品価値を高めるためにもみがらを使って栽培しているハマボウフウ。



▼とれのさとでも登場したアイスプラント。

石狩の特性を生かしながら、クリーンで高収益な野菜を栽培し、新たな地域ブランドを確立しようと取り組む施設があります。石狩市農業総合支援センターの「試験圃場」です。

平成22年に設立したそのきっかけは「ハマボウフウ」でした。かつては春の味覚として人々に親しまれたハマボウフウも、石狩浜などで乱獲が進み、今では滅多に口にすることができません。「試験圃場」では、そのハマボウフウを再び石狩ブランドにしようと栽培に挑戦。さらに、約2反(600坪)という広い敷地があることから、さつまいもや落花生など、北海道では難しいといわれる野菜づくりにも取り組みました。

3年目の今年、「試験圃場」のハウスを訪れると、四角豆や白刀豆しろなたまめ、バイオレットジャックに金時草きんじ草など珍しい野菜の苗がさまざまにありました。それら苗に

ハマボウフウからさつまいもまで 石狩のブランドを育てます

は全て、野菜の特性と播種日・定植日・種苗メーカーを明記したプレートが添えられ、さながら“立体図鑑”のような光景です。「昨年には180品種の野菜に挑戦しました。石狩のできる野菜は何かを追求するのが私のテーマです」とは技術指導に携わる専属職員の小亀哲雄さん。「ここで新ブランドを確立したら、農家さんに紹介して育ててもらい、とれのさと※に出荷してもらおう。そんな一連の流れをつくりたいですね」

見学に来た農家の方から例えば「暑さに強いブロッコリーはないか」と相談を受け、試験栽培をすることも。ここはまさに、石狩農業を支える中核的な施設です。

※「JAいしかり地物市場とれのさと」のこと

■石狩市農業総合支援センター ☎66-3345
試験圃場 函八幡1丁目415-4

新エネルギー都市へ向かって

巨大なLNG船の初入港を三カ月後に控え、新港中央埠頭には大型のドルフィン(栈橋)や地上型のタンクとしては国内最大級の施設が最終調整にはいつている。サハリン2の後方支援港として誘致活動を始めて有に十年は過ぎた。発電所も建設に向け諸準備に入っており、市では既にLNG国家備蓄の誘致へと目標を定め、液化天然ガスのまちをめざしている ◆安政年間、石狩調役荒井金助によりアツタ海岸に石油湧出を確認し、その後、明治初期試掘開坑された。時代とともに変遷を重ね終戦後も春別、五の沢など市内数カ所にて事業継続され、石油槽たくわの立ち並ぶまちであった ◆もう一つは、泥炭の産地としてである。一般家庭は、石炭に移行するまで泥炭が主力エネルギーであった。夏の泥炭堀、乾燥後は近所集まって順番に小屋入れをする、季節の風物詩でもあった。どの家も煙で燻くもしたような匂いがしたものだ ◆石狩はサケに開かれ、この様にエネルギーの供給地としての顔を持っていた。原子力問題は健康と直結するだけに関心は高いが、代わりうるものは何なのか、節電だけでは乗り切れまい。歴史的必然性に加え、洋上風力などの自然エネルギーや、港湾の持つポテンシャルを最大限生かしたプロジェクトを提案できるまちである。(市長)